

東京教区 礼拝音楽 NEWS

第6号

2022年6月5日

編集・発行／日本聖公会東京教区 礼拝音楽委員会

reihaiongaku.tko@nssk.org

CONTENTS

- ◆コロナ禍を経て、死と葬儀を考えるー 2022年の講習
- ◆＜体験記＞英国王立オルガニスト協会ディプロマ受験
- ◆＜リレーエッセイ＞北関東教区との協働

また会う日まで

教会で「見送る」こと



二年半に亘るコロナ禍で、わたしたちの日常・教会生活のさまざまな「当たり前」が覆されてきました。中でも「葬儀」の在りようの変化は、これまでわたしたちがどのようにして親しい方をお送りしてきたのか、どうやってその死を受け入れてきたか…ということを改めて考えさせられる出来事ではないかと思います。

新型コロナウイルスへの警戒感がより強かった2020年は特に、ご親族のみでのご葬儀、また教会ではなくお住まいの近くの斎場で…というケースも多かったのではないのでしょうか。愛唱聖歌に溢れたお見送りが憚られるような空気感もありました。私自身、ご葬儀に立ちあえなかった方に対して悲しみや寂しさはありつつも、なにかちゃんとお別れできていないような、気持ちの区切りがつかないような、モヤモヤとした喪失感を抱え続けている気がします。また参列が叶っても、絶えず人との距離を気にしながら故人にもご家族にも心身寄り添うことが難しい状況は、教会の本来あるべき姿とはかけ離れているようにも思えます。

一連の葬送の儀式を経て悲しみを分かち合い、別れを少しずつ受け入れ、希望をもって永遠の命へと送り出す。ご葬儀は送る側にとっても大

切なプロセスであることに気づかされました。そのプロセスが通常通り行えないとき、わたしたちはどのようにして大切な人を送り、気持ちを収めたらよいのでしょうか。聖歌が歌えないとき、物理的・時間的制約があるとき、既存の式文の中で工夫できることがあるのでしょうか？あるいはご葬儀以外のお別れの仕方などはあるのでしょうか？

そんなことを礼拝音楽委員同士がお互いの経験を交えながら話し合う中で、今年の通年テーマとして「死と葬儀」に向き合うことを決めました。別紙のご案内の通り、オンライン形式ではありますが6月下旬から3回にわたり、祈祷書・音楽・看取りなど様々な視点での講習会を開催します。また、講習後、ざっくばらんな語り合いの場としてのオンラインカフェ、秋頃には音楽によるメディテーションなども予定しています。

葬儀ができない、葬儀に参列できない現実を経験した今、教会共同体としてのお見送りの意味や様々な可能性について、ご一緒に考える機会になればと思います。

（高橋 牧：礼拝音楽委員）



体験記

教会オルガニストに 何が必要か、知りたくて

30歳でオルガンを学び始め、50歳で
英国王立協会ディプロマを取るまで

中島 郁代（礼拝音楽委員）

2018年、英国王立オルガニスト協会のディプロマ選考試験に挑戦しました。少し時間が経ってしまいましたが、体験を分かち合いたと思います。

なにも分からないまま奏楽者に

20代後半で洗礼を受け、やがて礼拝で奏楽をするようにと言われました。小中学生の頃ピアノを習ったことがあるという程度の私で、いいの？司祭や奏楽者の先輩方に尋ねると「素人の奉仕なのだから、下手でも気にしないで。今までの人がしてきたようにすればいいよ」という答えです。

しかし、そもそも礼拝に、どのような理由でどのような音楽が用いられるべきで、そのためにどんな技術が必要か、という根本的なことを知らないまま奉仕するというのは、なんだか恐ろしさを感じます。そこでオルガンの個人レッスンを受け、音楽大学の講座も調べてみましたが、コンサートで演奏するような曲とその技術を学ぶことに主眼が置かれているように感じました。私が学びたいこととは違うようです。

自己満足？自己顕示欲？

あちこちの教派、教会などで行われる「奏楽者研修会」の類いにも出席しました。でも、しばしば精神論・一般論で終わったり、講師の著名なオルガニストから「教会奏楽者は上手くなくてもいいのよ」と言われてしまったり。安心させてくださるつもりかもしれないけれど、行き止まりの気分です。いったい私は、下手なりに心を込め、ただ弾く、ということになぜ納得できないのか？技術や知識を得たいというのは、賞賛を浴びたい虚栄心、傲慢から来るものではないのか？と、5～6年の間、自問を繰り返

返していました。

預かったタラントを

そのころ、ふとしたきっかけから、英国王立オルガニスト協会（The Royal College of Organists = RCO）の存在を知りました。約150年前に教会オルガニストらによって設立されたRCOは「オルガンに関わるあらゆる立場の人を支える」を理念に掲げています。

神様からお預かりしたものを磨き増やしてお返しすることは、預かった者の使命である。そして、他者がおなじく神さまから預かったものにも心を寄せ、助けていく人になれ。根っこには、そのような考え方があります。私が今まで学びたくて仕方なかったその理由が、言語化されたと感じました。そして、RCOが主催するさまざまな講習会、ウェブサイトで入手できる教材を通して、私の求めてきたことが得られそうだという手応えがありました。

学びの道筋

ところで、英国のオルガニスト事情は、日本とは大きく違います。大聖堂など、英国教会の大きな礼拝の場面で奏楽しているオルガニストの多くは、音楽大学ではない一般の大学に「オルガン奨学生」として入学し、大学チャペルでオルガニストの助手をしながらそれぞれ専攻の学業と奏楽奉仕を両立。卒業時に学位のほかにRCOのディプロマ試験に合格したうえで、教会に奉職しているようです。

英国で教会オルガニストに求められる水準の目安がRCOディプロマであるのなら、その試験内容を勉強することは、日本聖公会で奏楽する上でも力になるのでは。少なくとも自分に足りないものが分かるだろう、と考えました。調べてみると受験料を支払って手続きすれば、年齢・学歴・国籍や居住地を問わず誰でも受験できるとのこと。そして、日本から拙い英語で問い合わせた私に対しても、「あらゆる人の学びを支える」という理念のとおり、ただちに「出来る限りサポートする」と返信をいただいたので

す。受験を決意し、ロンドンでの夏期講習に参加、紹介された教材で自習を始めました。それから、立教大学大学院でオルガン演奏法と、音楽学、礼拝学を勉強しました（短大卒ですが、RCOでの学びが認められ、大学院入学を許されたのでした）。

ディプロマ試験の内容からわかること

RCO ディプロマには3種類あります。Fellow (FRCO) は、だいたい大学院博士レベル。Associate (ARCO)：だいたい修士レベル。Colleague (CRCO) は学部卒レベル。今回受験した CRCO の試験内容は、このようなものでした。

1) 課題曲 (90 点)：

指定の楽曲群から3曲を選んで演奏。

2) キーボードスキル (60 点)：

初見で移調・通奏低音、聖歌伴奏（編曲）、新曲視奏。

3) 筆記試験 (90 分間、148 点)：

聴覚テスト、楽曲分析、対位法作曲、小論文。

実技試験の課題曲は、いわゆる超絶技巧を求めるような曲ではありません。英国の先生からは「RCO の試験は難曲をミスなく弾きこなすことを競うコンクールとは違う。与えられた場面に相応しい音楽を提供することが出来るかを考查するんだよ」と言われました。

その表れがキーボードスキル・テストです。たとえ慣れない曲や楽器・限られた条件下でも、できる限りの美しい音楽を――まさに現場で必要な力が問われる科目を、RCO は重視しています。キーボードスキルの訓練をしておけば、例えば葬儀のとき、斎場等で練習時間がないまま故人の愛唱歌を求められても、慌てずにお応えすることができます。

その力は、ただ繰り返し曲を弾くような練習では養うことができません。逆説的ですが、必要なのは和声法などの楽理や、教会音楽史といった「机の上での勉強」です。そこを足場にすれば、咄嗟に今自分の手が弾かなくてはいけない音、ふさわしい弾き方、ストップ操作つまり「そ

の場に合った音」を判断することが可能なのだと、筆記試験の準備をしているうちに分かってきました。

また、筆記試験の中で課された小論文は、「あなたがヴィエルヌの『24 の自由形式曲集』から2曲を選んでコンサートをするとしたら、どの曲を、どう弾くか。そして、お客様に曲や楽器についてどのように解説するかを論じなさい」というものでした。オルガンを通じて一般のかたに働きかける「アウトリーチ」の意識が問われる設問です。教会の宣教につながることです。オルガニストは宣教者――それが、RCO そして英国の教会が求めるオルガニスト像なのでしょう。

発表そしてディプロマ授与式

受験本番では小さなミスもあり、諦めの気持ちで可否発表を確認すると、驚いたことに合格。しかし合格そのものよりも嬉しく心に響いたのは、丁寧な講評付きの成績表でした。ミスへの減点はさほどなく、タッチや音選び、聖歌のアレンジやタイミングの取り方などが評価されていました。そして今後さらに学ぶべきこと、おすすめの文献リストなども書き添えてくださっています。まさに、育てるための試験なのだと感じました。

合格発表の数時間後に RCO から「実技試験での最高得点者として表彰されます」というメールが来ました。英語圏以外の国の在住者が最高得点賞をとるのは初めてとか。日本聖公会の恥さらしにならずに済んで、ホッとしました。授与式・表彰式は2019年3月にロンドンのサザーク大聖堂で行われ、同じ教会の奏楽者仲間、母と姉とともに出席しました。

RCO から受け取った多くのものを、教会や礼拝音楽委員会の活動を通じて、バトンタッチしていきたいと思っているところです。

預かりものを土に埋めておかないで増やしましょう。何歳からでも遅すぎることはない、私が証明します！ RCO での学びにご興味を持たれた方、どうぞお声かけください。

リレーエッセイ

同志の交わり

～北関東教区・東京教区の礼拝音楽委員会



2つの委員会が共催で「新『聖歌集』を歌う会」（通称「聖歌キャンプ」の第1回）を開催したのが、2006年8月でした。この時から、両委員会は交わりを続けてきました。とは言え、オンラインでの委員会など考えもしない頃のこと。会合を共にするのは困難で、互いの研修会の情報を知らせ合うのがせいぜいでした。隔年で開催されていた管区の「礼拝及び礼拝音楽担当者会」で他の教区の方々と共に旧交を温め合うごとに、「次回の聖歌キャンプは一緒に！」などと言いつつ、その後は共催ままならず、東京側で概要が決まるごとに「北関東の皆様もぜひどうぞ」とご案内するにとどまっていました。北関東のどこかで開催しては？と検討したこともありましたが、実現には至らず…。

第1回聖歌キャンプをふりかえりますと、それは現行『聖歌集』発行の4ヶ月ほど前のことでした。慣れ親しんだ古今聖歌集がどのように変わるのか、ドキドキがおさえられない方々が両教区から80名近く参加され、講師やスタッフを含め100名弱の大きな集まりとなりました。会場の立教女学院軽井沢キャンプ場に息苦しいほどに充満していた熱い思い、それも現在まで続く交わりの源泉となったかも知れません。

その回は、「祈禱書と聖歌集とわたしたちの礼拝」と題した森紀旦主教の主題講話を中心に、セッションが4つで合計7時間弱、そしてチャントや聖歌をふんだんに取り入れてお捧げする礼拝。新『聖歌集』は本がまだありませんから、「特選歌集」として100曲を選び小冊子にして用いました。アフターセッションでも時を忘れ

て歌い続け、とにかく様々な意味で心を動かされる1泊2日でした。

毎回、捧げられる礼拝を通してスタッフ自身が力を与えられる経験も、大きなことでした。教区の委員会の委員として奉仕していく原動力は、ここにもありました。

北関東教区の越智容子執事は、2006年の第1回と、2013、2014年の聖歌キャンプに参加。「2006年は新しい聖歌を、みんなで、飲んだり食べたりしながら歌い、眠るのが惜しくて、ほとんど夜通し歌っていたように思います。本当に喜びと希望に満ちた聖歌キャンプでした。その後、東日本大震災があり、聖歌を通して与えられる慰めや力を実感しました。」

今はコロナ禍により、以前のようにマスクをつけず、お酒を酌み交わし、熱く語り合いながら思いきり聖歌を歌う、というのは叶わない状況です。しかし、実際にみんなで集まって祈り、歌う、という事は、以前と同じようにはできない代わりに、実際に遠方まで出向くことが難しい状況にある方々、子育て中や、仕事のある人、高齢者の方々なども一緒に、ネットを介して共に祈り、歌い、語りあうことができる、そのような「近さ」を、わたしたちは持つようになったようにも思います。

その「近さ」によって、これまでより濃い交わりも可能になったことを大きな恵みとして、私たち2つの委員会は共に歩んで行きたいと願っています。

（北関東教区 礼拝音楽委員：執事 越智 容子
東京教区 礼拝音楽委員長：斉藤 響子）

東京教区 礼拝音楽講習会は Youtube で！ 詳細はチラシをごらんください